

<解説>

よりよい性教育をどのように構築していくか

関川光彦 長野県性教育研究会

筒井健雄 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

Toward Better Sex Education

SEKIGAWA Mitsuhiro :Nagano Prefecture Sex Education Research Society.

TSUTSUI Takeo :Center for Educational Research and Training, Faculty of Education,
Shinshu University.

Sex is one of the most essential, basic matters, one deeply concerned with our well-being and life. This paper reviews four reliable studies on how young men and women's awareness of and attitude toward sex.

Sex education is very important for everyone not only at puberty, but also through their whole life. We have, therefore, considered it on the large scale in order to foster better sex education from various viewpoints. We have studied how to promote sex education in our schools, homes and communities as well.

【キーワード】 意義と目的 性行動と性意識 学校での性教育 性教育の生涯教育化
教育学と性教育

1.はじめに 思春期における性教育では性行動・性意識・性感染症を初め予防介入の問題が益々重要になってきている。社会の情報化が促進されると共に、少子化・高齢化など環境の変容が大きいので生涯を通しての性教育が必要になってきている。諸調査の結果を踏まえつつ学校での性教育,各年齢ステージでの性教育,学校と地域保健との連携など全般にわたってよりよい性教育の構築のための足掛かりについて考えたい。また性教育を教育学の中に位置づける試みも考えたい。以上の考察においては19年間の実践から所感を述べたいと思う。

2.性教育の意義と目標

(1) 性教育の意義とは 1) ライフサイクルに応じた性的発達と変化に応じて生理・心理・社会の各側面から健康的で豊かな人間性と社会性を持った性意識と性行動を身につけるように、援助を与えること。2) 一生を健康で幸福に生きるために、豊かな人間性と健康な社会性を持つ性意識や性行動を各人が正しく選択できるようにするための人間教育。つまり性意識・性行動の合理化・人格化・社会化をはかる人間教育であるともいえる。

(2) 性教育の目標とは：男または女として自己認識を確かにし、男女の人間関係を正しく理解させること。社会的な資質を養い意志決定や行動・選択の能力を養うこと。豊かな心情・自己調整力を養い科学的知識を知ること。人間存在に敬意を持つ高い価値観を創造

する力量を体得すること等の四点である。

3.長野県性教育研究会の活動

1982年2月産婦人科医の丸山庸雄が中心となり各方面の協力を得て長野県性教育研究会が設立された。県・各市町村の後援を得て性教育の普及と啓蒙が県下全体に展開された。年2回の研究大会を県下各地を巡回で行った。保健婦等保健所関係者、養護教諭等学校関係者、医師、心理関係者など多くの参加を得て多大の成果を残した。参加者は徐々に多種多様な分野のものとなり性教育の普及が進行した。初代会長は吉岡利治、第2代会長は藤沢謙一郎である。各回の研究と報告テーマは次の通り。第1回：青少年を取り巻く性の現状と問題点。第2回・3回：人工妊娠中絶、医師の語る性教育。第4回：人工妊娠中絶と青少年の非行。第5回、第6回：青少年の健全育成と性を巡って。第7回：学校における性教育の進め方。第8回：新しい性教育の考え方と進め方。第9回：高齢者の性。以下記載省略。第19回：思春期へのサポート。各回これらのテーマに基づき講演が行われると共に何件かの研究発表がなされ討論がなされた。また各地区より現状報告と実践報告があり、各々これについての議論と展望・課題等について具体的・精力的に議論が展開された。2000年には長野県性教育研究会担当で第10回関東甲信越の性教育研究会を開催し「平等と共生を礎とした人間性を育む性教育をいかに構築していくか」を主テーマとした。

4.思春期の望まない妊娠・性感染症の調査・研究（2000年）

現在長野県大町保健所 内野英幸所長による「思春期の望まない妊娠・性感染症予防のためのモデルプログラム開発と評価に関するモデル事業」としての膨大な研究よりその一部分（詳細は省略）を紹介する。その研究では若者集団やその関係者（学校・保護者・医療など）を対象に面接法と質問紙法（生徒に87設問、教師に65設問）での調査を行い、結果は統計的に解析されている。質問調査は、平成11年に2つの高校の生徒（639人）、教師（78人）を対象になされた（後記する11参照）。下記の諸点が目立った。

（1）高校生の性に関する基礎データ。セックス経験者の割合は男子27.9%、女子40%。直近のセックスでコンドームを使用した者は63.8%。妊娠や中絶経験者の割合は全体で4.6%。セックス経験者の12%となった。

（2）性に関しては、タブーや価値観の多様性、思春期のダイナミックな変化などアプローチが極めて困難な面がある。即ち調査に当たっては様々な障壁や制限に遭遇する。

（3）若者に対して性に関する正しい情報提供や相談などの対応が充分に行われていない面が伺える。教育現場での日常的な信頼感作りのプロセスそのものが大切である。

（4）予防教育プログラムと予防介入の研究、若者の性を支えるオープンハウスの設立および企画運営などが大切。地域における関係各機関の連携が欠かせない。

（5）学校全体での性に対する全的な取り組みや理念がなく、担当者により変動がある。

5.財団法人日本性教育協会による第5回青少年の性行動調査

1999年11月から2000年1月までの調査の結果から特徴的部分だけを考察する。

1974年から6年おきに実施されているものであるが、第1に性行動の早期化と低年齢

化が指摘できる。生理的には発達は限界に来ていて、高校生と大学生の性交経験率が上昇してきている。中学生ではキス、デートの経験者が増加している。しかし、心理的側面での発達はまだ未熟である。第2に性的被害経験の増加がある。女子が大部分であるが男子の被害も出ている（意識が高まったこともある）。第3に性行動では女子の活発さが見られる。しかし、男は能動的、女は受動的の傾向は全体としてはある。第4に中学生・高校生のキス経験が増加するなど性行動の活発さが見られる。青少年の性行動の低年齢化には携帯電話の普及に加えて家族のコントロールの欠如と楽しさを求めての接近傾向が見られる。早期の性行動の意味づけでは、16歳前に性交を経験したものは後になり経験しない方がよかったとし、17歳以後での経験では経験してよかったとやや肯定的であり女子では深い関係になれた事を挙げている。性行動の取り方やイニシアティブの取り方について男女間に違いがある。第5に恋人（閉鎖的關係一性関係はある）と友人を区別してはいるが、親友と性行為をすることには抵抗感が少ない。恋人も親友も必要とする者には性交の経験者が多い。恋人は不要で親友だけでよいとする場合は愛情のない性交を容認する率が高い。傾向としては恋人との性行動では中学生にはデートが多く、高校生ではデートとキスが多く、大学生ではデート・キス・性交となっている。80%以上の性行動の高い場合と20%以下という性行動の場合には学校集団の影響は少ないが、20%から80%にある性行動経験のある場合は学校集団のもつ影響と傾向が見られる。第6に青少年の性行動の低年齢化はその情報源にも関係している。性情報は友人からが多く、親や授業から情報を得た者は性行動を比較的否定的に捕らえている。愛情のない性交については男子の方が肯定的であり、男子では先輩から情報を受け性交をして気持ちよくなったとし、女子では情報源による影響は余りなく状況次第で深い関係になれたと情緒的である。ビデオによる情報では気持ちがよくなかったが多い。避妊では親や授業から情報を得た者は実施率が高いが先輩や漫画やビデオからの情報のものは実施率が低い。男子、女子共に全体的に避妊率が低く甘い。または間違った避妊法をしている。情報源のありようが大切なことが伺える。第7に男子より女子に性被害が増加しており量的にも増大傾向にある。男子の場合には言葉による被害を受ける率が高い。第8に援助交際への批判力の低下傾向が見られる。

6.NHK「性についての実態調査」1999年11月・12月全国16歳から69歳まで3600人を層化2段無作為抽出法による。第一に国民全体では性についての関心はありが21%、どちらともいえないが45%、男子が86%関心あり女子は46%。性交の意味については愛情表現が主であるが、男子は快楽とストレス解消が多い。性交では義務・不快・自分と関係ないなどは30代をはじめとして高齢になるに従い女子により多くなっている。

第二に30代になると性体験は100%を満たしているが、20代では女子に高くそれ以外では男女同率。また過去1年間に性交の相手人数が1人が86%、2人以上が11%。

第三に未婚の男女が性交をするのはかまわないがほぼ47%とかなり許容的である。ただし他の部分については許容度は20%以下である。社会規範と個人規範に枠があることと思われる。社会規範の方が個人規範より強いと思われるものも多々ある。次に「パイアグ

ラの使用、18歳未満と性交する、恋人以外の人と性交する。夫婦なのに性交しない、金を払って性交する、妻以外と性交する、金をもらって性交する。夫以外と性交する、13歳前に性交する、薬を用いて行う、いやがる相手とする。」等は自分が自分を律する個人規範の中で行われている。確かな社会規範が働くことが期待される。

7. 東京都小中高校生の性意識・性行動に関する調査

(昭和52年以降5回目の調査より) 小学校5・6年生男女1937人、中学1・2・3年男女3614人、高校1・2・3年男女2927人、平成2年の調査より。

・印は項目、#印は対応。小学生の場合は紙数の関係で記述を省略した。

(1) 中学生について 過去の調査との比較等概略を述べる。

・男女交際では、「好きな人なら何もいわずについていく」が増加している。

#信頼できるとはどういうことかを掘り下げてみるのが大切。

・キス経験については、学年進行で増加し、何となくしたという遊び型の増加がある。

#意思決定や行動決定についての指導が大切。

・性交経験について、1年男1.9%、女1.8%、3年男6.7%、女3.4%、相手は男子は同級生以下、年下のもの。女子は年上のものが多くなっている。前回と比べ1/2年男子は殆ど差はないが3年男子は2倍、過去最高である。相手は1年では小学生や同級生。上級生になるに従い年上の者が相手となる。3年生では男女とも相手に高校生が多い。

・性交意識については、愛情が深まれば本人の自由とする性交肯定派が増加している。結婚するまではいけないとするのが12%前後で前回の約半分。

#性交肯定派の増加も含め、男女の人間関係や行動選択への指導が必要。

・避妊については、避妊の具体的方法をよく知らないものは男子30%、女子40%

#人間関係のあり方と共に避妊についての慎重な指導が求められる。

(2) 高校生について 過去の調査との比較等概略を述べる。

・行動の意思決定の基準では、信頼できる人なら男女とも33%が一緒についていく。

#意思決定や行動決定には個人差や男女差があるので丁寧な指導が必要。

・性交への見解では、結婚・婚約するまで性交をしないが男子が9.4%、

女子が19.8%で性交への否定見解は男女とも減少している。やりたいときはやる。

#性交や避妊を人間関係でしっかりととらえることが大切。

・初交は、男子では中学までと高校までの経験者が半々、女子では大部分が高校段階。

・性交相手は男子で高校生同士が多く、女子では高校生同士も多いが大学生社会人もある。

・初交の時の避妊では全学年について前回よりも避妊をしたものが減少している。

男子51.8%、女子で54.9%で各々減少している。

・複数回の性交経験では、初交経験時は男子の小学校10%、中学校40%、高校50%に対し、女子は小中学校で20%、高校で80%であるから年齢が向上するにつれ複数回の経験者が増加していると見られる。経験3回以上が多い。女子に複数経験者が特に多い。

#パートナーシップに基づいたものである事の指導が必要。

- ・避妊について（複数回性交の経験者）、避妊をしていないは男子 27.9 %、女子 19.7 % で状況は余り変わらない。高校生の避妊の実行率は低い。
- ・性交を求められたときの意志決定では相手の希望を受け入れて性交するのは男子が女子の 14 倍。話し合い性交をしないが女子は男子の 2 倍、絶対しないが女子は男子の 6 倍。
コントロールできる自己決定力を身につけることが大切。
- ・従来の特定の異性との交際は一般に男子が年長であった。最近では男子が年長の女子と、女子が年少の男子と交際している場合もある。男女交際で女子の積極化、男子の消極的傾向も見られる。しかし全体としては男子主導傾向である。
 - ・性に対して開放的な社会風潮や性情報の商業主義などがある上に孤独感情への耐性不足や自尊感情の欠如のために性行動に走るものが多くなっている。

8.性教育における基礎条件 性の学習と教育では次の3点が基礎条件であると考えられる。

①性の自認（性役割の学習）並びに②男女の人間関係の学習、③家庭社会の一員としての存在と働きである。これを3要素と呼ぼう。性教育では知識を得るだけでは不十分で、意志決定と行動において適正に機能し抑制力のあるものでないといけない。

この3要素を「生理学的遺伝的な性（sex）のヒト」の段階から「徐々に成長し社会的文化的な性（gender）の人間」になるまでに行い定着することが必要である。この3要素を「ヒトから人間」までの体系の中で如何に溶けこまして配置し実践するかが課題である。

9.学校における性教育の基本的態度として重視すべきもの

学校における性教育は当然ながら人格の完成をめざして行われるものであるが、それは「（1）学校教育の目的（法による）（2）学校教育の今日的課題（3）性教育の目標、（4）基本目標」の4つをもって人格の完成に向かうと考えてよい。

（2）は人間尊重・自己教育力・生きる力・主体的な判断・個性能力の伸張などが中心。

（3）は・子供の健康と安全・性的な発達課題がある。性的な発達課題に対しては家庭・社会からの要請がある。生徒の自発的積極的自然な参加も大切に欠かせない。ここで主なものとしては1）生命尊重・人間尊重の精神の育成。2）社会の変化に対応する性役割の問題への対応、3）性の情報環境の整備、4）青少年の健全育成があろう。

（4）基本目標には1）男・女としての自己認識即ち、男または女としての自己認識を確かなものにする（個人的）。2）人間尊重と男女平等の意識、男女の人間関係を正しく理解させる（対人関係）。3）家庭や社会の一員としての自己の役割を理解させる。社会的な資質を養い意志決定や選択能力を養う。家庭の中の大切な人としてよい家庭作りに積極的に協力する（社会的）。以上の体系の中で学校での性教育が構築されるのが重要な視点である。ところが教育では常に「人格の完成をめざして」と言われる。だが一体人格の完成とは何を言うのか、性教育において本格的に議論されたことは余りない。

10.性教育の基本となる3要素

3要素とは、「性の自認・性の役割、男女関係、家庭や社会の一員として」と述べた。

（1）性の自認と性の役割の理解について、その要点を例示しよう。

小学校（低学年）	小学校（高学年）	中学校	高等学校
・性の心理内容 男と女、平等感	・性の心理的内容 自我の目覚め	・性の心理的内容 性的欲求の発達	・性の心理的内容 人格と性行動
・性の生理的内容 体の違い 性器 誕生	性の自認、異性 ・二次性徴の発現	・性欲と性行動 ・性に対する不安 ・性の相談 ・性器の構造機能 ・性行動、自慰	・性差の役割意味 ・性の生理的内容 ・性器の構造機能 ・成長と成熟老化 ・受精妊娠出産育児

(2) 男女の人間関係などについて、その要点を例示しよう。

小学校（低学年）	小学校（高学年）	中学校	高等学校
みんな仲良く みんな友達 男女仲良く 仲良くするには	男女仲良く 男女の平等感 いたづら エチケット 好きになる	・男女の人間関係の成立 ・特定の異性との関係 ・異性の友人親友 ・性衝動と性意識 ・決定と性行動、差別 ・自己中心性 ・妊娠と感染症 ・男女間のエチケット ・言葉使い、行動様式	・男女間の人間関係 ・平等感の確立 ・自己中心性、責任 ・性衝動と意志決定 ・男女間のトラブル ・性交と責任 ・性感染症 ・多様な人間関係 ・避妊と中絶

(3) 家庭や社会の一員としての自覚について、その要点を例示しよう。

小学校（低学年）	小学校（高学年）	中学校	高等学校
家庭の仕事 できること お手伝い 家族との分担 協力 お手伝い 仲良く 安全 夜道	家庭における性の役割 色々な仕事の分担 協力助け合い いたわり合い 相談をする 自分の存在の意味 性の情報環境 性的被害加害関係 漫画等	家庭における性役割 職業と性 性の情報環境 二次性徴と性被害 性の問題行動 妊娠、感染症 性と社会 性被害、性非行 性の相談の充実	家族と家庭 職業と性 人権と性 性と社会 性思想と文化 妊娠、感染症 薬物、売買春 性思想と文化 男女関係と社会

11. 思春期の望まない妊娠・性感染症の調査・研究（2000年）

(1) 「生き抜くための Voice Letter」より県内の高校生500人へ調査。以下%は正解率。

- 1) 「避妊方法で最も確実な方法」では6.9%（ピルは毎日正しく服用すれば可）
- 2) 「健康に見えてもエイズウイルスに感染していることがあるか」では69.5%
（感染していても多くの人はずいぶん症状が出ずに普段の生活をしている）
- 3) 「エイズウイルスが性行為で感染しやすいのは男性より女性の方が多い」では

40.4 % (女性の方が男性より10倍は感染しやすいといわれている)

- 4) 性感染症にかかっていると、エイズウイルスに感染しやすくなると思うか」では
37.2 % (性感染症にかかっていると粘膜の炎症等により4倍から5倍感染しやすい)
 - 5) 「性感染症の原因となる病原体に感染するとすぐに症状がでると思うか」では
42.1 % (性感染症の多くは、特に女性では顕著な症状が見られないのが特徴)
 - 6) 「口を使ったセックスによって、性感染症になる可能性があると思うか」では19 %
(喉の咽頭粘膜は淋病やクラミジヤなどが感染しやすい部位)
 - 7) 「コンドームの使用はエイズウイルス感染の予防になると思うか」では74.1 %
(正しい使用をすれば100 %とは行かなくても予防効果はある)
 - 8) 「ピルはエイズウイルス感染の予防効果があると思うか」では56.1 %
(ピルは避妊には有効でもエイズウイルスや性感染症の感染予防にはならない)
- 学校教育での希望について高等学校の生徒と教師に対する調査、(%は生徒、教師の順。)
- 1) 純血教育 (3.7 %,3.8 %) 2) セックスを想定した安全な教育
(50.9 %,30.8 %) 3) セックス衝動を理性で制御できる教育 (13.9 %,26.9 %)
 - 4) 結婚して子供を産み育てる教育 (13.2 %,15.4 %)
 - 5) 人間・人格教育としての性教育 (14.3 %, 23.1 %)
 - 6) コンドームの実物を使った学校での性教育に賛成 (77.4 %,66 %) 反対 (22.6%,34%)
 - 7)セックスを想定した安全なセックスに関する性教育は性行動をあおるという
考え方について賛成 (52.1 %,42.9 %) 反対 (48.4 %,57.1 %)

12.性の発達課題と展開の枠組み

以上の状況にあるので、まず3要素を土台に設定し発達課題に即して組み立てる。発達段階に即した目標設定は基本的なものである。個人差のあることも配慮すべきこと。また基本的には「養う、知る、創る」もあるが、ここでは「知ること」について述べる。即ち「自分を知ること」、つまり自分の性を自然に受け入れ、自己の心身の変化を科学的に知り、対応する能力と態度を養う。次に「男女を知ること」即ち男女それぞれの特質と人間としての平等性、相互尊重する心情の養成と性の役割の男女関係を相互に理解し尊重する。「親子を知ること」、つまり生命の連続性、親子関係の愛情と絆、家族・家庭の大切さを知り生命の尊重と敬愛協力の心を大切にすること。「社会を知ること」は性文化や性道徳について健全な批判力と抑制力を持つこと。以上より下記の3点が基本的な事は既述。

(1) 性自認、性役割では(個人的側面) 1) 生理的発達と身体的発達の側面 2) 心理的発達と精神的発達の側面から学年進行で構築する。個人差の存在には十分注意。

(2) 男女関係(対人関係)についても上記の視点を押さえて学年進行で構築する。

(3) 家庭や社会の一員について(社会的側面)も同様である。

「性意識と性行動」は人格構造および心理構造や生殖系の機能構造ならびに社会機構などの総合的關係で構成されるので特に上記の3点には配慮が欠かせない。

13.生徒の参加と討論の展開

学校で性教育を行うに当たって最も重要な存在は生徒である。生徒達は発達に応じ様々な課題を抱えている。しかもそれを養護教諭以外には余り相談をしない実状にある。生徒同士の横の関係として取り組む試みも必要。実際は性のことで知りたいこと、困っていること、どうしたらよいか分からないこと、誰にも話せないこと等山積している。HRなどで相談の自由な時間を設定し、テーマや進行や問題の取り上げなどを生徒に自主的にやらせる工夫もある。この際正しい知識の獲得と偏見の是正については、援助が必要だろう。何回か繰り返して行くことに意味がある。担任と養護教諭の連携が必要になる。

14.学校の教育機能と性教育

学校における性教育は実際はあらゆる場面で展開できるであろう。教育課程上では性教育は数学を除く殆どの教科と内容的に関連している部分があるのでここを大切にする。それは性に関する内容の発展的な取り扱い、(教科、道徳などで)。性に関する問題の自主的前向きな対応(生徒会、学級会など)。性に関する様々な内容について総合的に対応する(HR、各種行事、特設時間、相談時間の特定)。人間の在り方生き方の点ですべての場面で設定する。その他教育課程外の裁量時間の中などでも工夫をしたい。

また生徒指導の中でも全体のものに対しての講演や映画、個別指導活動、個別相談活動そして例えば上記教育課程との関わりではこれらは次の流れの中で工夫ができればよい。

「学校の性教育に対する共通理解(学校の教育目標の一つ)～性教育の目標の設定と確認～指導内容の選択組織化(発達段階に必ず)～教育課程の中に位置づけて協力連絡相談を受ける～指導計画の作成一単位時間内での指導計画～授業展開と反省～個別相談個別指導」。協力体制を創る中でこのような展開ができればよいと思われる。共通理解が必要。

15.生涯教育の視点からの性教育～性教育の生涯教育化

人間は誕生から死に至るまで、性の事から逃れる事はできない。年齢相応に性の働きがあり、生きる張り合いと生き甲斐を持つ基にもなるのである。在学中だけの性教育に終わってはならない。在学中の性教育では第二次性徴の発達を含んで身心が大きく変化する時なので、組織的・体系的にまた個人差に応じての性教育が欠かせない。社会人になった後の性教育の継続も広い意味で必要である。それは青年期、壮年期、更年期、老年期初期、老年期と年齢に応じての性の課題を背負っているし、個人の悩みも大変多くかつ深刻なものも多いことによる。主には健康管理の学習を含めて地域社会が中心となる性教育が求められる。保健婦による性教育が中心となるが、助産婦、医師、臨床心理士、その他によるきめ細かな計画と被教育者が知りたい事への直接的な対応などの施策が求められる。一般的なものと個別的なものとを峻別した相談事業が大切となる。

16.各年齢ステージでの性教育課題

高齢化の中にあり各年齢ステージでの性の問題解決等の教育が必要になってきている。次の7点に留意し地域保健を重視してのこれらのネットワークづくりが大切といえよう。

(1)性教育は思春期の青少年にだけ行われるものでは決してない。性は心と体がある限り生から死に至るまで関係するものであり、家庭において胎児期から始まる。まず出産時

の助産婦や医師の暖かい細やかな指導と援助が必要である事は言うまでもない。

(2) まず幼児期では母親の暖かい愛情が大切である。スキンシップと共に笑顔による応答や気持ちのやりとりが欠かせない。生あるものへの愛情や母親のみならず両親への正しい性教育が求められるし必要となる。乳幼児期の性や心の発達の教育などが大切となろう。

(3) 幼少年期においても同様に家庭の暖かい雰囲気と子供の存在を大切にすることで。男女の体の違い、生活の仕方や服装や言葉遣いや遊び等まで含めて考える。親は子供の質問には否定的でない態度で優しく受容的に答えることなど、誕生会など諸行事を通して多くの人との関係についても配慮し、教育していく。

(4) 思春期・青年期ではジェンダーアイデンティティの発達を大切に。初経を肯定的にしかも明るく当然のものとしてとらえていく。アイデンティティの拡散と共にストレスの発生と精神的な心の揺れに対しても柔軟に優しく応ずる。心理的離乳、親からの独立についても正しい理解が必要である。いわゆる第二次性徴期における対応は明るく優しく受容的でしかも毅然としたものが大切である。疑問や不安への対応とその解消、自我の確立と社会的適応への援助、生活の異常に対する援助、異性への愛と協力、問題行動に対する批判力と意志決定での適切な抑制力、悩み事相談、個別教育とカウンセリングなどにもふれる。性の自認役割と男女関係、家庭や社会との関わりにふれることも大切である。行動面の発達への配慮も大切であり、地域にはオープンハウスの設立も欠かせない。

(5) 成人成熟期は安定してはいるが、妊娠中および産褥期の性生活は不安定である。それへ誤解の解消、性感染症への正しい知識、子育てに伴う諸問題に対処、個別相談が必要。

(6) 更年期の場合は閉経後の様々な状況への対応、セクシュアリティの存在を知ること。心の問題と環境、雰囲気など環境への配慮が必要。体調不良への暖かい配慮と対応が大切。

(7) 老年期でも当然性に対する関心は存在しているので配慮が必要である。男女で対応の違いはあるが、セクシュアリティの存在と高い精神性のある行動の充実が必要。老人への性教育・高齢者に潤いある生活ができるようにする配慮と工夫が必要。自尊心と性への関心には十分な配慮が必要。老年期の性生活への理解、介護の場合の配慮、配偶者不在の場合など、地域の保健婦等との連携が必要であり、熟練保健婦の活動が重視されて来る。

17.誰が何処でどのように

(1) 家庭では両親とりわけ母親の任務と関わりが不可欠である。生涯を通じての性教育では家庭が土台である。保健婦の指導と先輩からの協力が必要である。

(2) 幼稚園等では職員と母親との連携プレーが欠かせない。情報交換が大切である。

(3) 入学後も家庭での躰のあり方が大きく影響するので、学校では養護教諭と担任とが連絡を取り、家庭では父親の生き様にふれることが大切となる。思春期の発達に関わり、両親には性教育に関する研修が大切となる。家庭の明るい雰囲気が大切で、悩み事も困り事も話せるような受容的な環境が大切である。

(4) 家庭でも学校でも、地域社会における保健婦等との連携が非常に重要である。

18.地域社会における性教育活動について

前記 16.との関わりで考え、組織化する事が求められる。家庭、学校、会社、地域団体、または任意の集まり等では地域の保健婦との連携が不可欠となる。保健婦の存在の大きい事の理解が大切である。地域保健をいかに展開していくか。連携協力の体制をどう組み立てるか。特に学校での性教育は学校の中で閉鎖的になりがちなので、地域の保健婦と学校の連携を密にして行くことが欠かせない。養護教諭と保健婦との協力が大切である。保健婦の学校内への出入りが効果的である。地域のオープンハウスのものも必要になる。

19.教育学の中への性教育の確立

性教育は特に医療関係者、教員等によって主に進められてきて大きな成果を得ている。しかし教育学者からの性教育への対応は手薄で、今後教育学の中に性教育を構築していくことが求められる。文明論や人間学や臨床の立場を枠組みにして構築する必要がある。

(1) 文明論として次の視点で組み立てる工夫。・飽食少子化核家族時代の性の状況を見据えて・便利さの進行と情報化の中での性の状況を見据えて・人間の歴史の示すものから・民俗学などの日本文化の点から・自由と自己中心化の進行を見据えて・国際化と日本的なものを見据えて・薬物や性感染症を見据えて・家族形態の変容から・情報化の進展の人間の心と思考や判断行動様式に及ぼす広範な影響などを見据えて。以上が視点 1

(2) 新しい意味での人間学の視点から組み立てる工夫・集団と個との狭間での性・価値の多様化と自己の人権と関わる性・人間関係・性差心理学(含む間性)・発達心理学・人格論・心の発達と身体の発達の視点から・家族夫婦関係家庭の状況や変化の中での人間の発達の視点から・障害者弱者の性の視点・生命科学や生殖科学の進行と生命倫理からの視点・現代の経済思想哲学の状況からの視点・人間存在と性の視点・基本的人権と性・人格とは何か人格の完成とは何かの視点。生一性一死の体系からの視点。以上が視点 2

(3) 臨床の立場からの工夫。臨床心理・学校経営・教育課程論・生理学・産科学・医学・犯罪心理学・地域共同体・家庭家族関係・現実での性行動様式の諸点。以上が視点 3

20. まとめ

時代と共に社会の様子も大きく変容しているので性教育の意義・目的への配慮と検討が必要である。特に若者の性意識と性行動、妊娠・中絶・性感染症等も改めて見直し予防介入の対策が求められる。地域保健の活動を充実し学校・家庭・地域の連携協力が欠かせない。また学校での性教育の充実と展開(保健婦も参加)が大切である。全年齢層を視野に入れての性教育の生涯教育化も欠かせないし、地域でのネットワークづくりなどが必要になろう。教育学の中への性教育の位置づけと、基礎研究の作業が今後は大切になろう。

参考文献

- | | | |
|---------------|--------------------------------------|---------|
| 東京都幼小中高性教育研究会 | 1990年「新児童生徒の性」 | 学校図書 |
| 田能村祐麒 | 1987年「性教育の考え方進め方」 | 学校図書 |
| 内野英幸 | 2000年「思春期の望まない妊娠・性感染症予防のためのモデルプログラム」 | |
| NHK | 2000年「性についての実態調査」 | NHK |
| 日本性教育協会 | 2000年「第5回青少年性行動調査」 | 日本性教育協会 |

(2001年3月31日 受付)